こしがや市民大学冬季講座

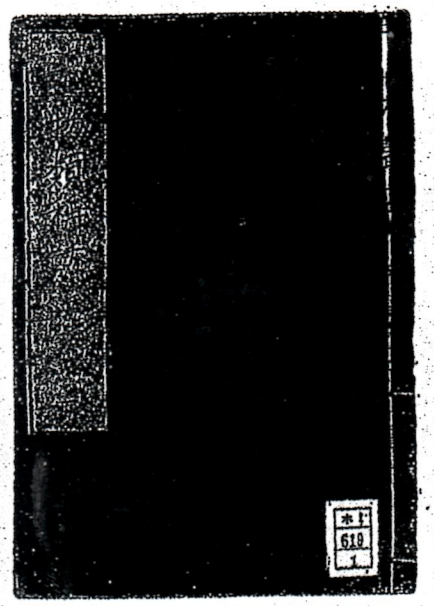
平成25年3月1日(金)

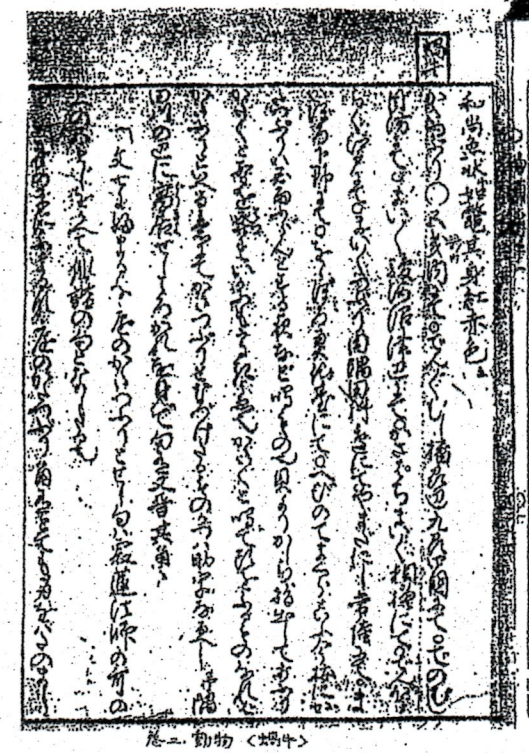
越谷吾山と方言

▲法橋吾山肖像(『雪を花』所収)

NPO法人越谷市郷土研究会

常任理事　渡邊和照





越谷吾山年譜

一七一七　享保二年　会田文之助（後の越谷吾山）　生まれる。（蓑子説、新町会田説）

一七四〇　元文五年　越谷吾山二十三歳処女作
卯の華にわたして散や白つつじ（白井鳥酔『冬野あそび』）

一七四三　寛保三年　佐久間柳居『芭蕉翁五十四回忌追善集』に
うぐひすの子もしほらしや手向草　越谷吾山。

一七四四　延享元年　柳居『安実陀笠』に
この寺の人参ふとし大根引　越谷吾山　他に四句。

一七六八　明和五年　越谷吾山五十一歳　江戸に移り住む。

一七七〇　明和七年　越谷吾山　江戸馬喰町一丁目東よこ町を住居とする。
この頃俳壇に新風が吹き荒れる。

一七七四　安永三年　越谷吾山　日本橋に転居。
師竹庵吾山　歳旦帖『東海藻』、同『神右記』を刊行。

一七七五　安永四年　越谷吾山『諸国方言　物類称呼』を刊行。

一七七六　安永五年　越谷吾山『東海藻』を刊行。

一七七七　安永六年　越谷吾山　法橋に叙せられる。
越谷吾山　『和漢通気』完成する。

一七七九　安永八年　越谷吾山　『雅言俗語翌検』を刊行。

一七八〇　安永九年　渉無庵太初『閑古鳥』（柳居三十三回忌追善集）に
見定めるうちに飛けりかんこ鳥　越谷吾山

一七八三　天明三年　越谷吾山　日本橋より堺町に移る。

一七八四　天明四年　越谷吾山　『朱紫』を刊行。

一七八七　天明七年　越谷吾山没（七十一歳）　深川霊厳寺に葬る。
吾山辞世『華と見し雪はきのふそもとの水』　古吾山

一七八八　天明八年　吾山一回忌追善集『雪を花』（もとの水）を刊行。

一七九一　寛政三年　吾山の門弟滝沢馬琴著『岡崎談』（吾山三回忌追善）完成

一八〇〇　寛政十二年　『諸国方言物類称呼』の改題本、『和歌連俳諸国方言』刊行。

一八〇五　文化二年　滝沢馬琴『椿説弓張月』を刊行。

一八四九　嘉永二年　吾山句碑　出る日の旅のころもやはつかすみ　越谷久伊豆神社に建

一九三四　昭和九年　吾山百五十年忌碑　ひとつるへ水のひかるやけさの秋　天嶽寺に建

●越谷吾山について

越谷吾山は江戸時代の享保 2 年(1717 年)頃の生まれで、のちに江戸に出て活躍し天明 7 年(1787 年)12 月 17 日に 71 歳で没しています。吾山は越ケ谷の新町の旧家会田家の 6 代か 7 代目の会田文之助にあたると考えられています。

吾山は「俳諧翌檜」(1779 年)などを著し、俳人として優れていて芸道の高い称号である[法橋]の位が授けられています。吾山の晩年の頃「南総里見八犬伝」の著者としてよく知られている滝沢馬琴(1767~1848 年)は俳諧を学ぶために吾山に師事しています。また吾山は学者としてもすぐれ、特に吾山の名を高めたのは、吾山が 59 歳の時、安永 4 年(1775 年)に完成した[物類称呼]であります。これは全国の方言をまとめたもので、この種のものとしてはわが国最初であり、それゆえ吾山は『方言学の祖』といえます。

吾山の[物類称呼]は江戸期最大最高の全国方言辞典であることは云うまでもありませんが、二十世紀、敗戦前まで、一人の手になるこうした全国的規模の方言辞典は存在しませんでした。まことに希有にして絶賛すべき一大労作です。しかし多くの日本人からはほとんど忘れさられ、わずかにこの方面の専門学者によって、その功績が受けとめられ、発展させられているにすぎません。

吾山の研究は当時、十八世紀のヨーロッパの方言研究と比較しても、決して劣ることのない大きな仕事であったといえます。一埼玉県民・越谷市民の文化的財産としてだけではなく、ひろく、日本人のことばや民俗の原点をさぐる記念碑とすべき業績として越谷吾山を誇りにしたいものです。

●会田家について

吾山の家系を語る場合、文政初年(十九世紀初)に成立の福井猷貞(権右衛門、1769~1822)「越ケ谷瓜の蔓」がよき参考書になりす。これによりますと、越谷には会田七家が存在していることがわかります。本家本元は海野小太郎ということになります。

吾山の本名は会田文之助です。「会田」は越谷には多い姓です。信州は甲斐・武田家の家来であった海野小太郎の子孫で、天正 2 年越ケ谷に移住定着したといわれています。いまの越谷市出羽地区を開拓した会田出羽をはじめとする会田七家のなかで新町の名主であった会田四郎兵衛家の出身であります。

このように会田家は信州会田の出自であり、天正年中(1573~1591)というかなり古いときから越ケ谷に在住したことがわかります。会田は元来、{海野}姓であつたこともわかります。また広大な地を領していたことや、その子孫がまたそれぞれ分家して、越ケ谷に多く居住していることも知られています。

●「諸国方言・物類称呼」について

物類称呼は全五巻の著作であります。本書は半紙半とよぶ大きさの五巻五冊からなるもので、分量的にも当時の数え方からいけば、すべてで百九丁・現代風になおせば B6 判・二百ページほどになり、特に大著述というわけではありませんが、見出し語を調べてみますと、合計 550 語、対応してあげられている方言は 3200 語ほどです。

吾山は方言のための方言研究家ではなく、人間、日常の生活、地方の人々の生活や慣習に関心を持って、そのための方言を選択したということです。

方言採集の目的にはきわめて明確であり、ことばの正道を歩むものといっていいのではないでしょうか。

そして内容的にはつぎのような分類と分量になっています。( )内は各部門の見出し語数です。

*巻一　[天地・人倫] (61 語)
天地・ほくしん(北辰)、ほくと(北斗)
ぼう(昴)、しん(参)、かぜ(風)　他
人倫・ちち(父)、はは(母)、あに(兄　)他
*巻二　[動物] (138 語)
むま(馬)、うし(牛)、いのしし(野猪)
きつね(狐)、ねずみ(鼠)　他
*巻三　[生植] (157 語)
こめ(米)、ささげ(紅豆)、ぶんどう(緑豆)、いも(芋)　他
*巻四　[器用・衣食] (92 語)
器用・しめ(注連)、やたい(屋台)、かうで(紙手)、いなこき(稲扱)　他
衣食・はをり(羽織)、はかま(袴)、づきん(頭巾)、こしをび(腰帯)　他
*巻五　[言語] (102 語)
大いなる事、多いと云事、
わざとといふ事、
労して苦しむこと、他
合計 550 語です。

●吾山の方言学とその方法について

◎吾山が駆使した参考文献について
*辞書の類　7 本
和名抄、新井白石の東雅、南留別志、他
*方言を解釈するうえでの出典調べ用参考文献　35 本
伊勢物語、源氏物語、古事記、
徒然草、平家物語、他
*歌集・和歌の類　28 本
古今集、万葉集、紫式部歌、一休和尚発句、他
*その他　23 本
会津風土記、他
*登場の人物(実質的には著書を兼ねる)
阿部氏、西行法師、曾呂利新左衛門、
武田信玄、豊臣秀吉、源頼朝、他
*漢籍・仏典の類　33 本
古文前集，三才図会、史記、他

以上が「物類称呼」に現れた諸文献資料です。

ことに「和名抄」がよく用いられています。「和名抄」は日本最古の百科事典ですが、吾山はおそらく、元和三年(1617)刊行(古活字板)のものか、慶安元年(1648)・寛文七年(1667)に刊行(整版)の板本「倭名類聚抄」を用いたものと思います。

●吾山研究の一例・「蝸牛」について
かたつむり

現代の標準的呼称ではカタツムリですから、カタツブリはその地位を奪われたことになります。しかし煙もケブリ‥‥ケムリとなるように、ブとムはよく交替するのでいずれも正当です。「和名抄」にはカタツブリでみえますから、むしろこのほうが歴史的にも由緒からも正当といえます。系統としてはデンデンムシ、マイマイ、カタツブリの三種が考えられます。同じ虫でも西と東と異なる見方、考え方があってのことと推量できます。しかしやはり都中心といいますか、デンデンムシの勢力は広範で、相模のデンボウラクもこの系統としますと、東へかなり張り出していることになります。

こうしたなかで、仙台でヘビノテマクラ(蛇の手枕)というのもユーモアがあって、ほほえましい地方人の心のゆとりを感じさせます。海のヒトデを章魚の手枕という地方もありますが、共通したユーモア精神です。
さらに、ヤマダニシも興味をそそります。文字通り、田螺と似て、山(陸)にいるからヤマダニシと、既存のものから類推したあたらしい命名です。(蛞蝓　なめくじり)でも、(越後にてやまなまこと云う)とみえますので、この種の命名は常法ともいえます。
長野の方言で蛇を土手鰻というところがありますが、同じ命名のメカニズム、精神でしょうか。日本語は山と海は相互に名を授受するところがあったと思います。

●蝸　牛

カタツブリ(古名)・マイマイツブリ(江戸)
マエマエ(筑前)・マイマイ(同上・遠州・越前・防州・作州・備後)・カサパチマイマイ(駿河)・デデムシ(京)・デムシ・デブシ(予州松山)・デッボロ(同上)・カタタ(共同上・吉田)・デゴナ(勢州津)・デバノ(桑名)・
デイデイ(同上・松坂)・デンデンコボシ(和州)・デンデンゴウ(讃州高松)・デンデンムシ(同上・丸亀・阿州・備前)・デンノムシ(播州立野)・デノムシ(同上・赤穂・四国・九州)・デンボウラク(相州)・ヤマダニシ(隅田川辺)・マイボロ(常州)・オホボロ(下野)・ヘビノテマクラ(仙台)・ヘビノタマクラ・ツノダシムシ(共同上)・メンメン(涌谷)・タマクラ(同上)・ダイダイムシ(雲州)・モウイ(石州)・デンガラムシ(能州)・くワヘヒヤウ(隅州)・ツンナン(琉球)　　合計32語です

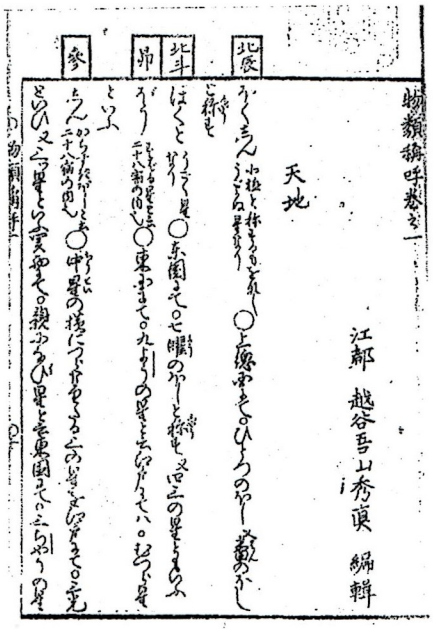
この「物類称呼」について、平田篤胤は文化12年(1815年)の伴　信友にあてた書簡に[諸国方言物類称呼などというもの御覧被成候か随分取べき事もあり薄き五冊也]と記されています。

●吾山の方言学は未だ生きています

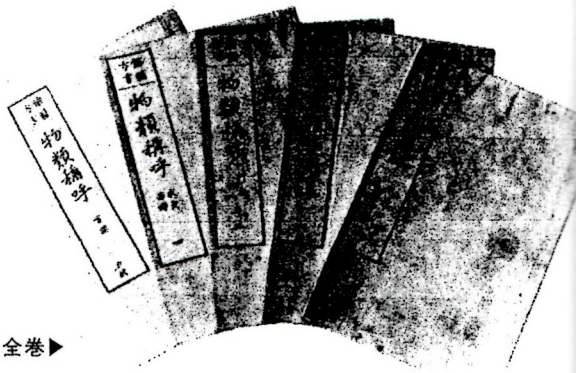
平成二十年、方言学の権威・東京女子大学の篠崎晃一先生をご講演の依頼にお訪ねすると、「毎年新学期に、方言学の最初の講義では必ず、越谷吾山の話をします。」とのことです。現在でも脈々と吾山が生き続けているようです。なんと素晴らしいことではないでしょうか。

●ドイツにおける方言学

ドイツにおける方言学の始祖は、あの童話で有名なグリム兄弟です。
吾山の没年が1787年、グリムの兄が1785年生まれ、弟が1786年生まれと、何か生まれ変わりがあったような関係がなんとも不思議です。


物類称呼巻之一
江都　越谷吾山秀東　編輯
天地

「物類称呼」本文冒頭▶



「諸国方言物類称呼」全巻▶

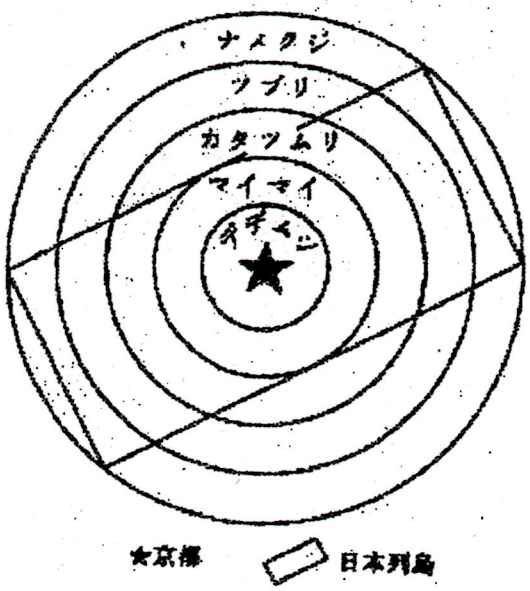
方言周圏論

民俗学者柳田国男が、『蝸牛考』(1930) において提唱した論。

文化の中心地で新語・新表現が生まれては徐々に周辺へと伝わっていく。その結果、古い語形ほど中心から遠い外側の地域に、新しい語形ほど内側に分布することになる。

柳田は、「蝸牛」を表す語が、近畿地方の「デデムシ」を中心に東北、九州方面へむけて、「マイマイ、カタツムリ、ツブリ、ナメクジ」の順に同心円上に分布していることから、「ナメクジ」が一番古く、「デデムシ」が一番新しい形であるとした。つまり、かつて京都では蝸牛の方言がナメクジ→ツブリ→カタツムリ→マイマイ→デデムシのような変化をたどったことになる。

蝸牛方言の周圏分布



ことばの伝播モデル

	周辺部α	周辺部	都市	周辺部	周辺部α
時代1			←A→		
時代2		←A	←B→	A→	
現代	←A	←B	←C→	B→	A→

(A,B,Cは同じ意味を表す異なった言語形式を表す)

知荷の所説也其色赤色也

かこふ○○その巻物をもってくもし壽命也九穴の因みて○そのとひ

国あそてハまいく後の胎体せすしてかさすもちまいく相模にても亦

らく物をもすらくてその内補助ハ名に○やまぶに○常陸にて

いなめく○をちそ○ほの異名にて○へびのてあそくと云○稀に

うぶハ名あるくとしる○蝦蟇と呼をの是具なり○是指牛○ぬ

ぶくこ登と登をいふもの紀急かくと呼て○ぬかよみも[illegible]

むかし○首をかけつずとせる○異名あるへ[illegible]

田乃の上に異名せるかれを見て○句あるは又普其角

「文せよ始めの○をのかいつぶりとせし句ハ寂蓮法師の句の

上のあとしをとて俳諧の句となりしと

「木のうちにかくれ座のかいつぶり角ありて[illegible]

蛞蝓

なめくぢり○書法にて○そびうまいぶろ越後にて○山なまこと云山津にハ

たまひ六寸許のもあると見え京箱田なめくぢりと異名なをたるひのぶりて

蝸牛の変化なると注もことごとく不然

蛇

へび○つたへ及西国にハ○くちなハと云東国に○へび薩摩にて女の詞に○

たららしと云畿内にて○くちなハと云屋上にをるて鼠を逐ひ雀の雛を捕

るを是黄頷蛇也近江にて○さとまハりと云播磨にて○ちなぶそと云又

ぱのほまて○やまかびそと云又○縣つとりと云越前にて○やまかゞちと云一種に

あまてハ山かゞちと云近江にて○青大将と云又一種巨蛇和名をろち

東国にて○わたりと云近江にて○あをそと云又一種黄頷及

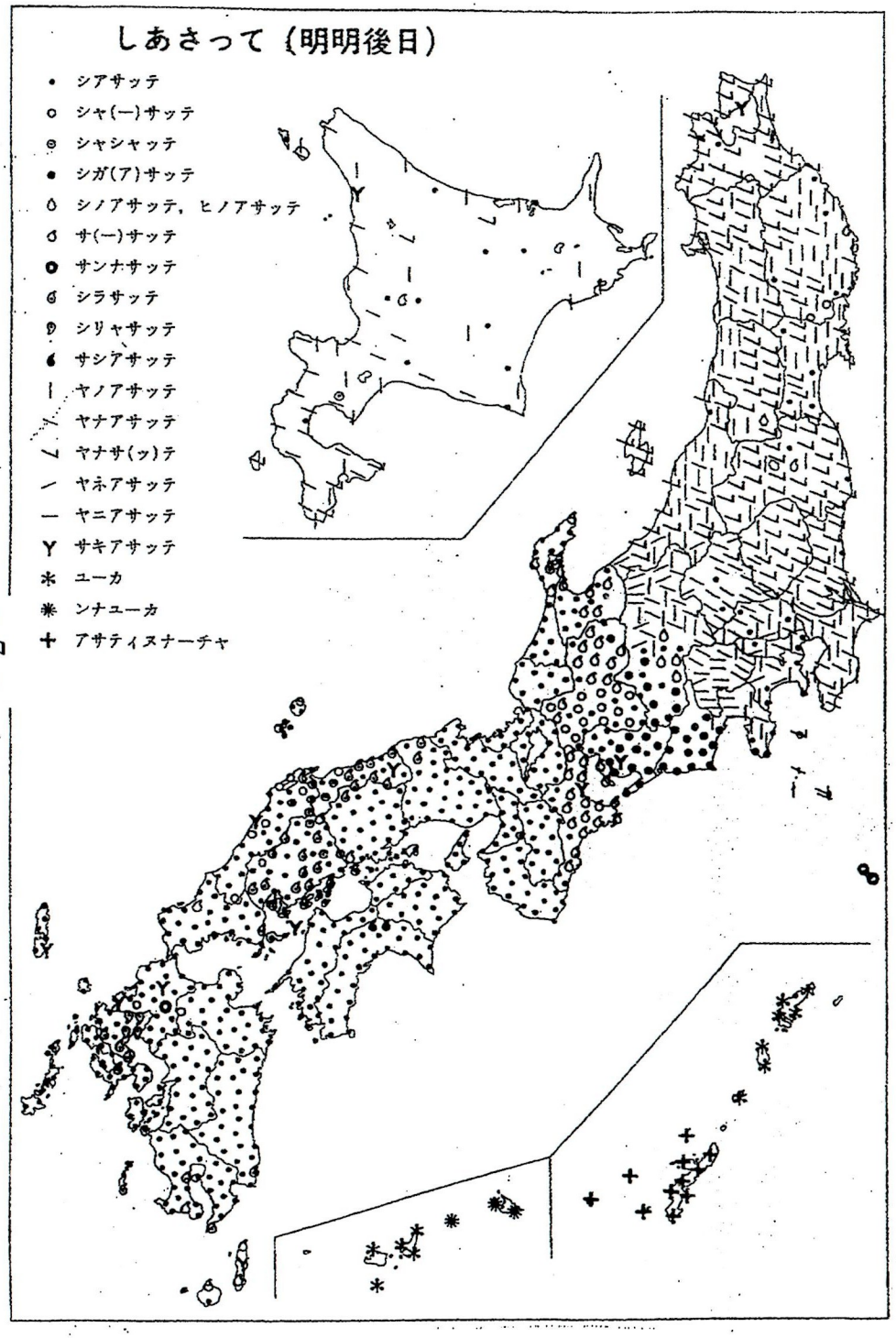
赤蛇を○かハ烏といふ越後にて○もぐろへびと云越前にて○う

まじ○何ほにてひらくちと云遠州にて○えめとをいふ

くちなハと云

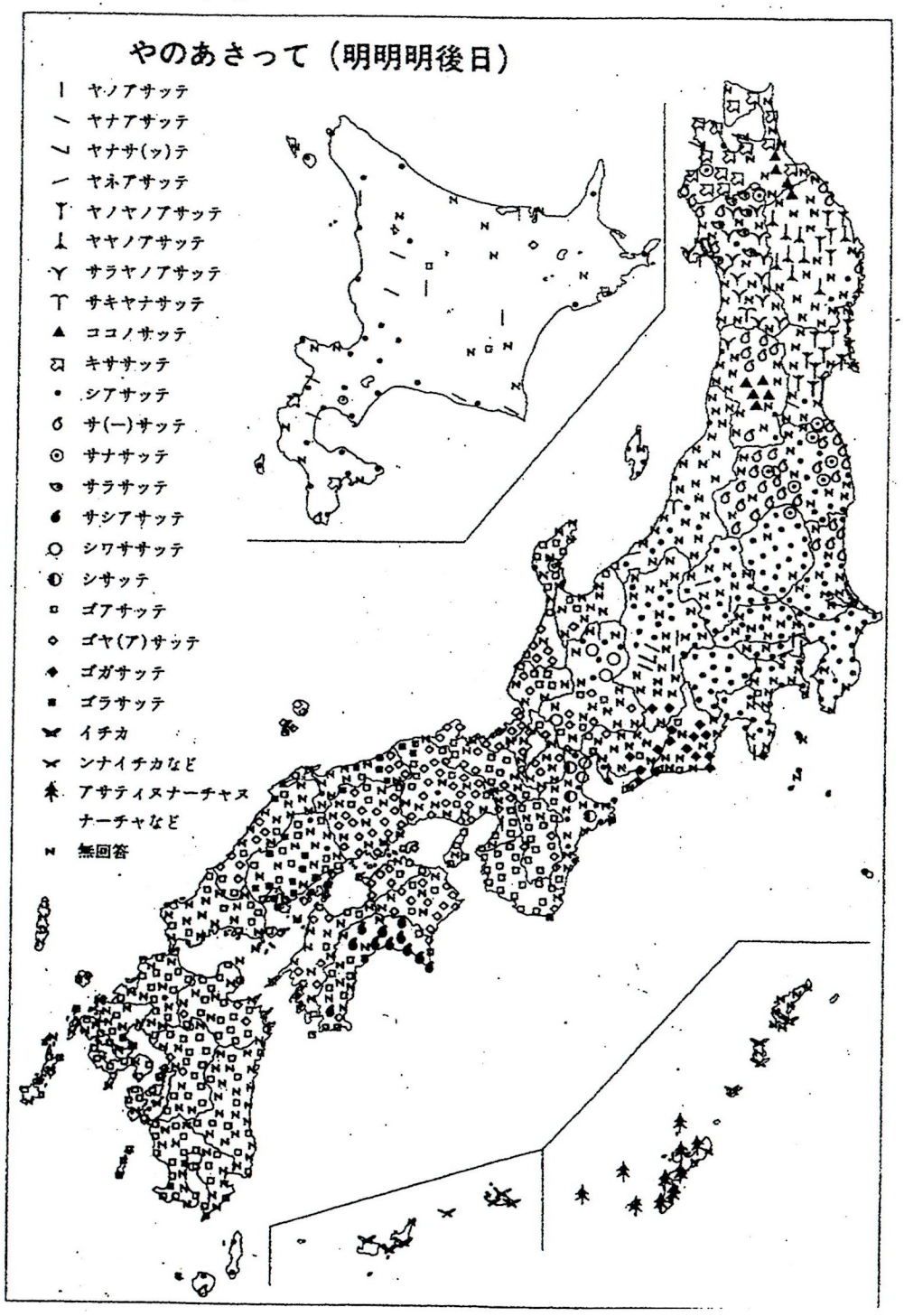
しあさって（明明後日）

- シアサッテ
- シャ(ー)サッテ
- シャシャッテ
- シガ(ア)サッテ
- シノアサッテ，ヒノアサッテ
- サ(ー)サッテ
- サンナサッテ
- シラサッテ
- シリャサッテ
- サシアサッテ
- ヤノアサッテ
- ヤナアサッテ
- ヤナサ(ッ)テ
- ヤネアサッテ
- ヤニアサッテ
- サキアサッテ
- ユーカ
- ンナユーカ
- アサティヌナーチャ

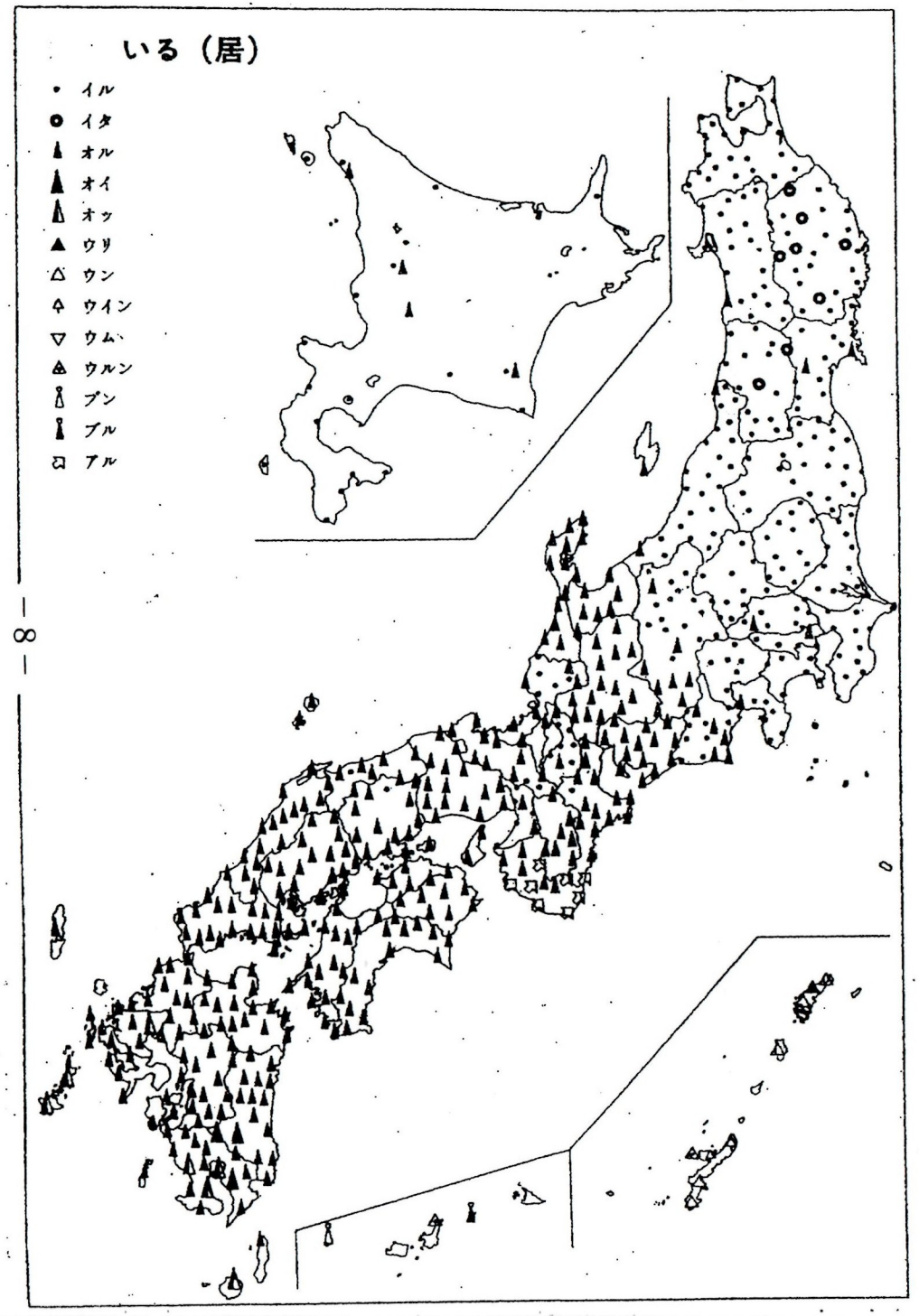


やのあさって（明明明後日）

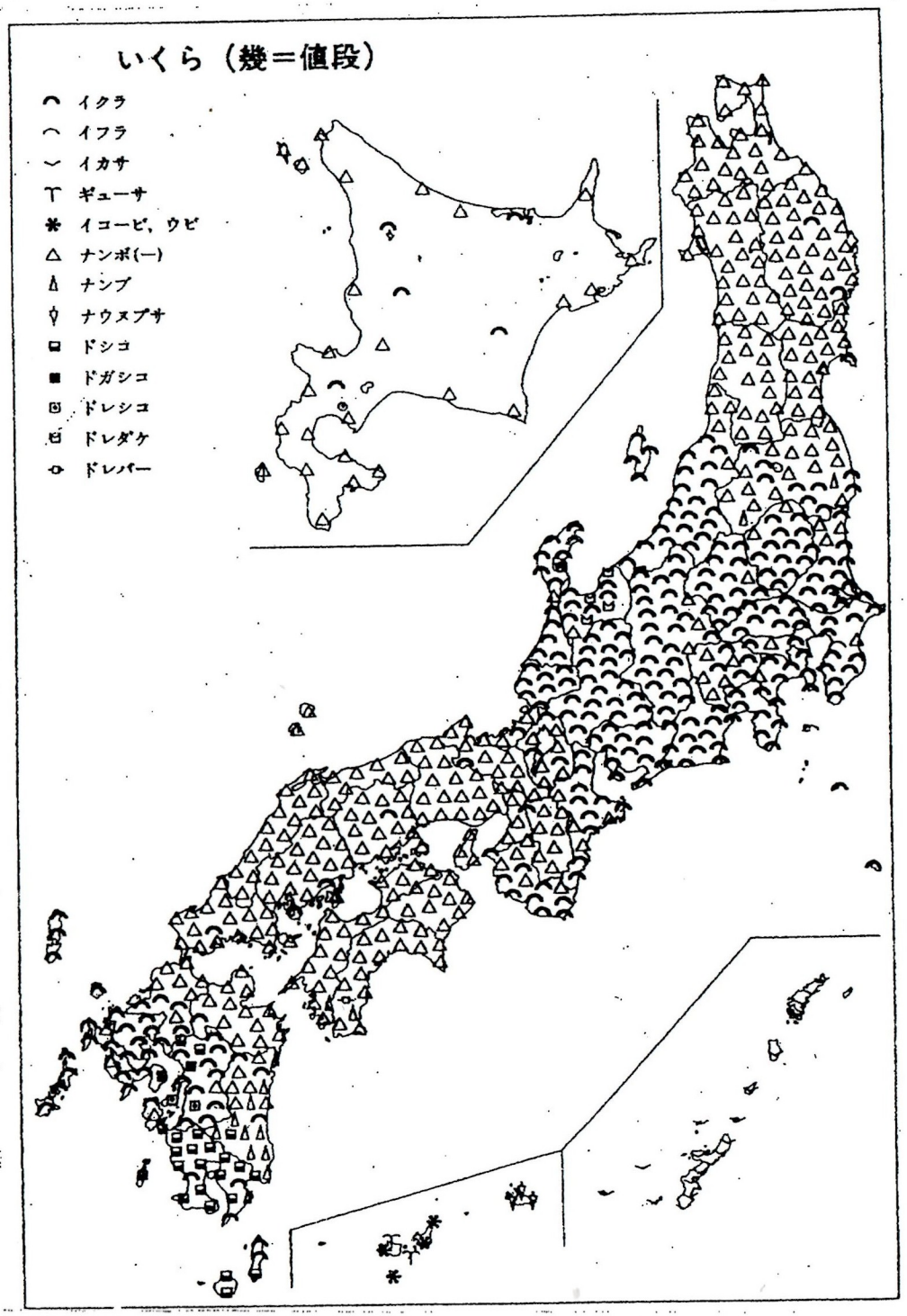
- ヤノアサッテ
- ヤナアサッテ
- ヤナサ(ッ)テ
- ヤネアサッテ
- ヤノヤノアサッテ
- ヤヤノアサッテ
- サラヤノアサッテ
- サキヤナサッテ
- ココノサッテ
- キササッテ
- シアサッテ
- サ(ー)サッテ
- サナサッテ
- サラサッテ
- サシアサッテ
- シワササッテ
- シサッテ
- ゴアサッテ
- ゴヤ(ア)サッテ
- ゴガサッテ
- ゴラサッテ
- イチカ
- ンナイチカなど
- アサティヌナーチャヌナーチャなど
- 無回答



いる（居）


イル
イタ
オル
オイ
オッ
ウリ
ウン
ウイン
ウム
ウルン
ブン
ブル
アル

いくら（幾＝値段）


イクラ
イフラ
イカサ
ギューサ
イコーピ，ウピ
ナンボ(一)
ナシブ
ナウヌプサ
ドシコ
ドガシコ
ドレシコ
ドレダケ
ドレバー

●物類称呼・巻一[天地・人倫]

(天地)の部には、次の三十一語が収録されています。

ほくしん(北辰)　ほくと(北斗)　ぼう(昴)　しん(参)　かぜ(風)　なつぐも(夏雲)　にじ(虹)　しぐれ(液雨)　ゆき(雪)　しも(霜)　つらら(氷柱)　いて(凍)　みづ(水)　どろ(泥)　みなくち(水口)　はら(原)　どて(土堤)　がけ(岸険)　たに(谷)　いはや(岩窟)　あな(穴)　よつつじ(四会)　こうぢ(小路)　かし(河岸)　ねや(閨房)　ひさし(庇)　ぢしん(地震)　いし(石)　ひなた(日南)　かみなづき(神無月)　つごもり(晦日)　　合計三十一語

はじめの(北辰)を例にして、全体的な形式を示すこととします。ちょうど現代国語辞典と逆の見出し語形式……漢字・平仮名表記の順……になっています。そして注釈をする場合はいずれも、細字双行で国名を先に出して、その方言を与えています。その場合、国名は上に○印を付して区別しています。

北辰　ほくしん　北極と称するものをなしうごかぬ星なり

○上総国にて・ひとつのほし又番のほしと称す

見出し語は漢字で与え、それに対応する一般的言い方を平仮名で与えています。
(天地)でもっとも分量の多いのは(風)です。風にもいろいろの種類があるわけですが、(畿内及中国の船人のことば)からはじめて順次、越後までを取りあげています。全体的には必ずしも特に定まった順序はありません。当時の日本の中心地、畿内あるいは江戸を最初にあげるということでもなかったようです。

(風)　○畿内及中国の船人のことば。西北の風==あなぜ。二月の風==をに北(ぎた)。三月の風==へばりごち。四月末の方より吹く風==あぶらませ。五月の南風==あらはへ。六月末の風==しらはへ。土用中の北風==土用あい。七月末の風==おくりまぜ。八月の風==あをぎた。九月の風==はま西。十月の風==ほしの入りごち。十一月十二月の頃吹く風==大西。

以上ですが、おそらくはじめの(西北の風)も一月の場合をさすのではないかと思います。国別ですが、風の場合は月によっても呼称を異にするので、上記のように列挙しています。

次に(西国)以下の場合をあげてみます。

○　西国、南風=はへ、東南の風=しやばへ。
○　北国、東風=あゆの風、西北の風=よりけ、北風=ひとつあゆ、東北の風=ぢあゆ、丑の方より吹く風=まあゆ。他
○　江戸、東南の風=いなさ、下総、東風=ごち、未申の方より吹く風=富士南、東北の風=ならい・つくばらい、西北の風=はがち。
○　伊勢ノ国鳥羽、或は伊豆の船詞、二月十五日前後に十七日ほど、いかにもやはらかに吹く風=ねはん西風、三月土用少し前より吹く南風=あぶらまじ。他
○　近江の国湖水にて、風の定らぬ事を論議、日和風=といて、湖上の風=根わたし、他
○　播磨辺、四国、春南風にて雨を催す風=やうず。
○　越後、東風=だし、西北の風=しもにし、西南の風=ひかた。

以上が(風)について、吾山の記録している方言です。当時、いかに俳諧師が全国的にネットワークをもっていたとしても、これほどの収集は、やはり吾山の能力、才能につきると思います。

物類稱呼巻之一

江都　越谷吾山秀貞　編輯

天地

北斗

ほくとしちせい　○東國にて。七曜のかしと稱す　又この星をもふ

昴

すばる　二十八宿の内し　○東國にて。九つの星とも云ひ　もつら星

參

とふ

さんかいしんとも　二十八宿の内し　○中國の樣につかをつくるこの星をひかにて。元

とひ又三つ星とも云ふ　東國にて。親ゐるひ星と云ふ　この星

風

と呼ぶ　武藏の國　葛西にて。さんろかしとふ

かぜ　○奏國及中國の和人のおとこにおこの風をつわかせと云ふ　二月の

風を。をこのかぜとふ　三月の風を。ゑごのかぜとも云ひ　方ゐの風を

いなばらまぜ　云ふ　四月の南風を。あらしへとふ　六月の風を。ちこうまぜ

とふ　云ふ　五月の北風を。ちこうまぜと云ふ　六月の

風を。ちこうまぜとふ　七月の風を。ちこうまぜと云ふ　八月の

風を。さまのかとふ　九月の風を。さまのかとふ　十月の風を。ごかしの入ぐち

とふ　十月の風を。大西と云ふ　○西國にて南風を。ゑとふ　東の

風を。ゑとふ　○北國にて南風を。ゑとふ　西の風を。ゑとふ　東の

風を。ひとかぜとふ　ひとかぜとも云ふ　東の風を。ちあゆとふ　ちあゆ

ちあゆ風を。ちあゆとも云ふ　南風を。ちこうまぜと云ふ　○江戸にて東南の風を

いなさとふ　東の風を。ならいと云ふ　つくばなりとも云ふ　西の風を

云ふ　風を。下総にてとふ　未申の方より吹風を。富士まぜと云ふ

●ことばによる芸術　[俳句]

江戸時代の方言研究は二つの方向から開始されました。一つは直接にことばを操って創作に従事する人々、すなわち俳諧師といわれる人たちで、その鋭い言語感覚から、俗語や方言にふかい関心をもっていたわけです。

俳諧というのは、今風にいえば、
五・七・五とつづる俳句==俳句は明治になって正岡子規が言い出した呼称==の祖です。
これは吾山の表芸でもあります。

●俳諧人としての吾山について

越ケ谷は昔から俳諧の盛んなところで、吾山は 24 歳の時に、江戸の武士で俳人の佐久間柳居の門に入りました。柳居の没後二世(沾山)に師事し、明和 7 年(1770 年)頃に作品の可否・優劣を判定する判者になり独立しました。日本橋室坊(室町)に住居を構えたころに庵号を師竹庵と称していました。

吾山の門人には武士が多く、また諸侯へも出入りをしていて、有名な滝沢馬琴もその一人でありました。

吾山 61 歳、還暦の年に「法橋」の位が授けられました。門人であった諸侯が一致して推挙した結果であったと考えられます。

吾山の門人は江戸はもとより、広沢連,桐生連、千住連、草加連、蒲生連、新田連、大沢連、越谷連など諸所にありました。

吾山晩年の頃、「南総里見八犬伝」の著者としてよく知られている滝沢馬琴が吾山に俳諧を学んでいます。この馬琴は吾山のことを
「実に蕉翁(松尾芭蕉)の再生やといわん、
後世　蕉翁なきことを憂うることなかれ」と激賞したとあります。

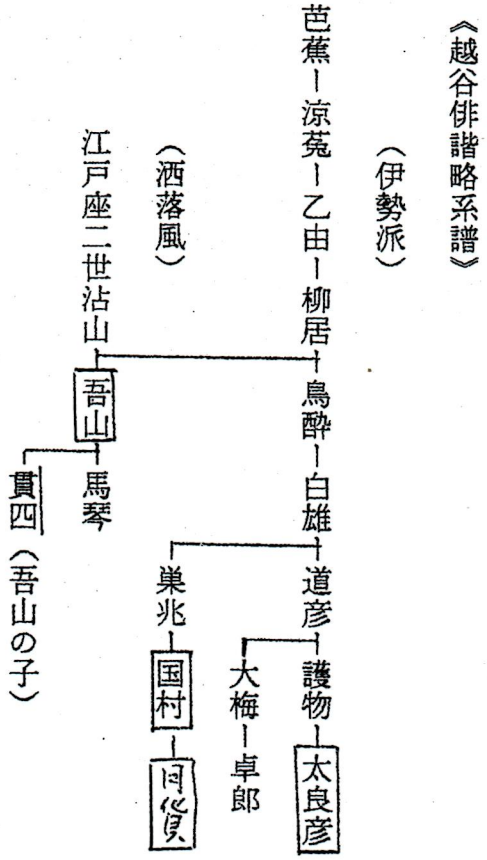
以上から吾山は蕉風(芭蕉のはじめた俳句の作風)を受けついた越谷市の誇れる優れた俳人であり、また我が国の方言学の祖といえます。

天明 7 年 12 月 17 日七十一歳で日本橋室坊(室町)で静かに眼を閉じました。

花と見し雪はきのうぞ今朝の水
これが辞世の句です。

●越谷周辺の俳諧師たち
小林一茶と埼玉の俳人

小林一茶の自筆稿本(俳諧書留)である「随斎筆紀」には十三人の埼玉俳人が収録されています。一茶は単なる埼玉の通過者ではなく、埼玉の俳人と深い関わりを持っていました。



●加茂国村(国村)

俳諧作者、生没年未詳。文政(1818~30)末ごろまで存命か。本名高橋甚蔵、武蔵国蒲生の人．巣兆門。師の巣兆没後、秋香庵を継承。文化 14 年(1817)、巣兆の句集「會波可里」を編集刊行。

句　「風花も降らうけしきの柳かな」

ところで、蒲生に高橋姓は非常に多いですが、「杉間集配本扣」の「蒲生河岸」の指摘は、極めて重要であります。蒲生河岸は、藤助河岸とも言って、寛保三年(1743)創設以来代々高橋藤助家が河岸問屋を世襲した綾瀬川の主要河川場でありました。現在も藤助の子孫が酒屋を営んで、藤助河岸を守っておりますが、国村はこの高橋藤助の一族ではなかったかと考えられます。

●埼玉庵太良彦

中村太良彦、寛政 6~寛永 3(1792~1850)江戸時代中・後期の俳人。瓦曽根村(越谷市)の名主で、徳川将軍家用の御膳細糯という特殊な糯米を栽培・納入していた家の七代目。名は一精、通称彦左衛門、俳歴はよくわからないが、埼玉庵太郎彦と称し、江戸や埼玉地域の俳人と広く交際し、彼等の句を集めた[さいたま春帖]を刊行していました。
また一茶とも文通をしていた間柄でありました。

句　「はつ冬やけふは不断の人通り」

●氷佳と南山

氷佳は、大沢宿の旅籠、柏屋弥平太の俳号であります。天保七年刊「俳諧人名録初編下」に「武州日光道中、大沢柏屋、大垣氏」として出句している。別号は麦花庵と言った。

句　「生垣やことしのり越すうめの花」

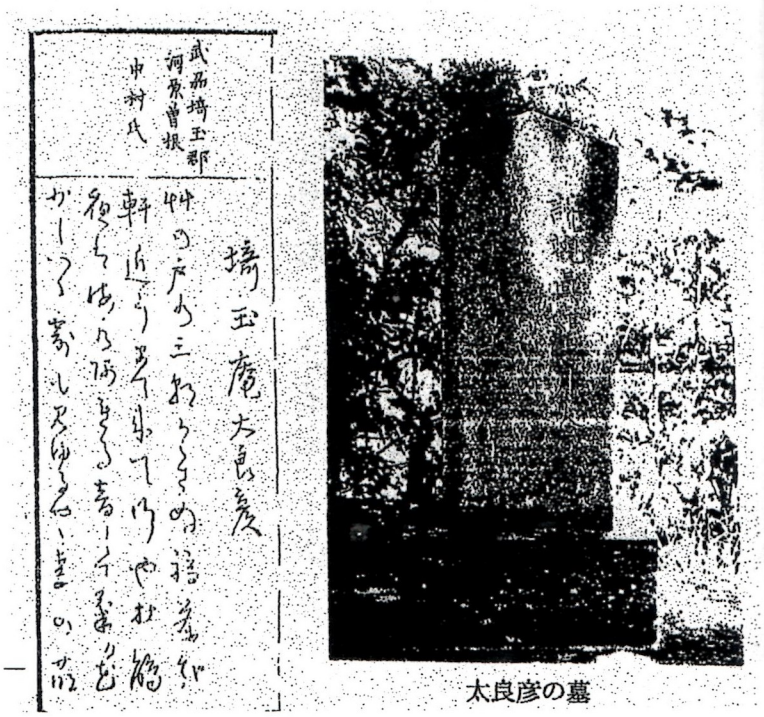
享保年間(1716~1735)、永佳の曾祖父伝四郎が旅籠屋柏屋を開業し、御用宿(本陣付属の旅籠)となり、町年寄も勤めるまでとなりました。

●南山

南山については、「釈　　南山」とあるところから、「大相模不動尊==真大山大聖寺」の僧ではないかと思われますが、今のところ何の手掛かりもありません。

句　「初手水笑へば神も笑ふなり」

このように見てきますと、吾山以後の越谷俳諧史も、いかに華やかなものであったか、お分かりいただけると思います。
宿場町「越谷」は、レベルの高い「文化的なまち」であったことが俳諧のジャンルからも証明されると思います。



太良彦の墓

●越谷市内の吾山の軌跡をたずねて

◎久伊豆神社の参道の「第三鳥居」の左側にある池の前方正面に、吾山の句碑が建立されております。

（第三鳥居は平成五年の第61回伊勢神宮の式年遷宮で、伊勢神宮内宮の南御門を久伊豆神社がいただき、平成7年に建立されたものであります。因みに今年は第62回の式年遷宮の年に当たります。式年遷宮は20年に一度行われる日本の一大神事であります。）

句碑の表面

出る日の旅のころもやはつかすみ

法橋吾山

句碑の裏面

嘉永二年巳酉正月十三日

伊勢太々講中

この久伊豆神社と吾山の関連はよくわかりませんが、嘉永二年(1849)というと没後63年目にあたります。多分弟子たちの手になるものでしょうが、どのような意図で、この　碑を建立したのかは未詳です。

他に、この久伊豆神社には「荒城の月」の作詞で知られる、明治~大正の詩人、土井晩翠の碑や幕末の国学者・思想家として著名な平田篤胤の遺徳碑(昭和17年10月建立)、越谷が生んだ日本一の力持ち、三之宮卯之助の力石(越谷市文化財指定予定)などがあります。

◎久伊豆神社の左側に天獄寺があります。この天獄寺自体が名刹で、山門は黒門であり、四代目の住職が正親町(おおぎまち)天皇(在位1557~1586)の第三皇子であったところから建てられました。屋根には「菊の御紋章」の鉄鋲が施されています。

初代の家康から、第十二代の将軍家慶までの御朱印帳墨付きも所蔵、塔頭も五寺あったとのことで、現在の黒門と赤門も往時の偉観を偲ばせます。

赤門の手前左側に吾山・百五十年忌碑銘があります。

句碑の表面

ひとつるへ水のひかるやけさの秋

吾山

句碑の裏面

師竹庵吾山は越谷の人　姓は會田氏名は秀眞　信濃の名族　海野の裔なり　方言を究め俳諧を好み　柳居・沾山の門に学ぶ　法橋に叙せらる　曲亭馬琴の師なり　天明七年未年十二月十七日七十一歳を以って江戸に死す　著すところ　物類称呼・翌檜・朱紫　等あり　　月と汐

昭和九年十二月十日

當山三十世　榎本一成　石工　小島　勝

◎天獄寺の墓所の吾山の墓

墓所への案内板があるので、わかりやすくたどりつけます。

吾山の法名(戒名)

ほうきょうおうよござんしちくこじ

「浤(法)橋徃(往)譽(誉)吾山師竹居士」

こうよみょうしんしんにょ

「浩誉妙清信女」

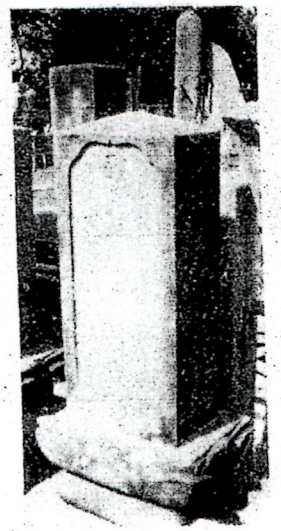
吾山の墓石の向かって右どなりにある墓石の側面に、これと全く同じ法名があることから、神田家からでた吾山の後妻(二番目の妻)と考えられます。

越谷吾山の墓石が会田家の墓地ではなく、そこから少し離れている神田家の墓地にあります。それについてなぜ神田家の墓地内にあるのか、二・三のみかたがあります。

その一つに、吾山の墓石は滝沢馬琴の記述によると、江戸深川の霊厳寺にあることになっています。しかし現在は見当たりません。

それは吾山の二番目の妻の実家にあたる神田家の誰かが霊厳寺から天獄寺に移し、妻の名などを刻み改めて葬ったので、神田家の墓地にあるのだとしています。

また吾山は会田文之助であることも判明しました。



▲吾山の墓碑
(越谷市・天獄寺内)

●吾山と越ケ谷とその風土

吉田東伍の「大日本地名辞典」に(南埼玉郡・越谷)についてこう紹介しています。

越ケ谷は日光、奥州街道の宿駅にあたり、かつ、江戸からおよそ六里という近いところに位置していたとことから、江戸人には恰好の息抜きのところでもありました。半面また、越ケ谷の人にとっても、花のお江戸への往還、滞在を志すのには適当な距離にあったと思われます。吾山のような学問や教養を身につけんとする知識人には、地理的にはまことに便利なところだったわけです。おそらく一泊するつもりであれば、江戸文化・芸術も十分にたのしめたと思います。

そして興味があるのは、子孫の一人、会田平吉が酒屋を営んで、江戸日本橋に住んでいたことも知られています。

したがって、越ケ谷の会田家はかなり隆盛を誇っていて、文之助はその会田家七家のうち、会田四郎兵衛を祖として、九右衛門----六左衛門という系譜をたどる会田家の一つで、吾山はこの会田家に養子になったことが推定できます。

こうして吾山は新町の会田家の一つに養子となり、当然の成り行きとして、(東名主)の名主として活躍する運命を背負ったことになります。いずれにせよ養子として、農に精進せず、期待を裏切って、いわば家業を怠りがちだったことが会田家没落の遠因かもしれません。吾山はその顔も足も江戸の方に向きっぱなしだったことは想像にかたくありません。

越ケ谷の俳諧愛好者は越ケ谷から江戸に出て、逆に江戸から越ケ谷を訪れる俳諧師もあって、江戸==越ケ谷間にはいわば俳諧街道が設定されていたようです。

越ケ谷宿との関係で、もう一人、ぜひとも紹介しておくべき江戸期の重要な人物がいます。国学者として著名な　平田篤胤(1776~1843)です。吾山とはまさしく一世紀のちの、しかも篤胤はよそものですが、現在でも久伊豆神社の境内に碑があるように、越谷とは切っても切れないゆかりある学者です。篤胤の門弟で、物心両面での強力なスポンサーが、越ケ谷の山崎長右衛門篤利です。

また、篤胤の第三の妻、おりせ(はじめの妻で死没の織瀬と同じ)は、越ケ谷の豆腐屋の娘で、文政元年(1818)二十七歳のとき、四十三歳の篤胤と結婚しています。

後の生涯でのよき伴侶として篤胤に仕えるのですが、天保十二年(1841)に、篤胤が幕命により国許の秋田に追放される折に、ともに下り、苦労しながら必死に耐えて夫の研究に助力しています。

おりせの内助の功はもとよりですが、彼女が精細に記録しておいたところこそ、篤胤の学問と人を知るうえの貴重な、有力な資料でもあるわけです。別の意味で、篤胤の書簡に吾山の「物類称呼」がみえるのも、ことばの研究をしていた篤胤と越ケ谷との固い結びつきを暗示する材料となりましょう。

越谷の文化的風土性は吾山と決して無縁ではありません。

こうした学問や文化の豊かな土壌風土に大輪の花を咲かせたのが、越谷吾山であり[物類称呼]ではないでしょうか。

●下記の文献・資料を参考にさせていただきました。

*杉本つとむ著
「方言に憑かれた男　越谷吾山」
平成元年9月初版・さきたま出版会

*篠崎晃一・平成20年越谷市郷土研究会歴史講演会レジュメ
「方言の世界=越谷吾山から方言学へ」
東京女子大学教授

*高崎　力・平成16年高齢者学級桜井大学校レジュメ
「郷土の人物　越谷吾山について」
NPO法人越谷市郷土研究会常任顧問

*内野勝裕・平成18年越谷市郷土研究会歴史講演会レジュメ
「越谷周辺の俳諧師たち」
毛呂山町歴史民俗資料館　町史編さん専門調査員

*八島晃正著
「続越谷町秘話」・昭和33年7月発行
埼玉日報論説委員

*埼玉県郷土文化会・平成10年10月出版
「埼玉史談第45巻第3号」

*越谷吾山著
「物類称呼」巻一・巻二
国立国会図書館　安永四年出版

*加藤幸一・作成資料
「越谷吾山について」
越谷市郷土研究会